

聴覚・身体から 知的の人たちも雇用へ

コクヨKハート株式会社
ハートランド株式会社

職場
ポ

EMPLOYMENT
REPORT

(文) 清原れい子 (写真) 小山博孝



コクヨKハート株式会社

〒537-0013 大阪府大阪市東成区大今里南6-8-10
TEL 06-6973-9322 FAX 06-6973-9346

ハートランド株式会社

〒590-0524 大阪府泉南市幡代2018
TEL 072-480-0567 FAX 072-480-0321





ココヨKハートの社内

聴覚障害者の 職場を確保せよ！

「ココヨKハート株式会社」と「ハートランド株式会社」は、ともにココヨの子会社。操業開始は二〇〇四年と二〇〇七年。主な事業は、印刷・製本業と農業の水耕栽培。働くのは、聴覚障害者を中心とした身体障害者と、知的障害者と精神障害者も視野に。

ココヨは、戦前から聴覚障害者の雇用を進め、わが国でいち早く設立された大阪府身体障害者雇用促進協議会（現大阪府雇用開発協会）の創立メンバーの一社である。

ココヨKハートは大阪市の東、ココヨ本社から数分のところであり、社員四人。うち聴覚障害者二三人と身体障害者五人が働くココヨの特例子会社だ。ココ



ハートランド株仲井道博社長



ココヨKハート株時枝民生社長

ヨKハートでは、「障害を持つことは害ではない」との考えから、「大きな岩を前に進むことができず、思案し悩んでいる様子」を表す『碍』の漢字を使っている。そこで、今回のルポでは本文は法律に準じて「障害」と表記したい。

設立のきっかけは、国内生産体制の再編の一環として八尾工場を閉鎖することに伴い、長年働いてきた聴覚障害者の雇用をどう確保するかが懸案となつて、二代目社長を務めた仲井道博さんが特例子会社準備室長の任を受けた。

「八尾工場の仕事は滋賀工場へ移すことになりましたが、工場が閉鎖される二〇〇三年一二月までに、住居を変えずに聴覚障害の人たちの仕事場をつくってほしいというのが宿題でした」

初代社長の西川岬さんと取締役統括部長の田井潔さんと三人で検討した結果、印刷業をとの結論に達した。工場の立ち

上げには、ココヨの家具系工場の建設計画を担当した経験を生かして、田井さんが活躍。後に田井さんはハートランドの設備も立ち上げた。

「彼がいたから、二つの設備の立ち上げができたんですよ」と仲井さん。八尾工場から一七人が異動。新たに六人を雇用して、操業が始まった。異動組はベテランとはいえ、大きな組織の一員として担当していた仕事はごく一部で、受注から納品までを担うのは初めて。操業早々、田井さんの奮闘が始まった。

「大きな機械のスイッチを押すとか、言われたことだけをやっていればよかったのが、新しい機械の使い方を覚え、商品の勉強もしなければなりません。助けしてくれる人は誰もいません。受注から納品までの一連の経験のないメンバーが集まって、ぶっつけ本番でしたから、責任をもって自分たちで全部やるというニュアンスを理解してもらうのがたいへんでした」

立ち上げは、本当にたいへんだったらしい。

「私が機械の操作を覚えつつ、手話を覚えつつでした。設備の立ち上げは苦になりませんでした。設備の立ち上げは苦になりませんが、会話が通じない人たちに仕事を教える必要ありません。『頼むからやってくれ』という意味が通じなくて、土下座をしたこともありました。最初のころは工場で何が起きるかわ



DTPを担当する古澤由香理さん



名刺印刷のリーダー川原学さん

からなくて外出するのも恐ろしく、一年ぐらい経ってやっと有給休暇をとれる気持ちになりました」

立ち上げ当初から現在まで手話通訳を務めている辻孝治さんは、八尾工場の製版室の担当課長時代、聴覚障害者が多く配属され、手話を覚えた。

「ろうあ者から手話を覚えて欲しいと頼まれたんです。何で？と聞くと、手話ができないと話ができないと言われました。立ち上げのときは、仕事が早くできるようにと懸命に伝えました」

ほぼ一年半後、寺田孝さんが製作部長に就任して、現場を見ることになった。

「私があったときには大体の下地ができていましたし、八尾工場時代、聴覚障害者と接していましたから、違和感はありませんでした。自分に甘くはいけない、自分で責任を持って仕事をしなければいけないという意識を徹底してきました」

田井さんは会社

全体の統括に専念できるようにしたい。社員の働く意識も少しずつ変わってきた。

「私は人事半分、現場半分でしたが、細かいところまで目が届くよう



田井潔統括部長（コクヨKハート）

になりました。いま、現場でボーっとしている人はいないでしょ」

リーダーが三人誕生。さらに能力アップを

最初はマイナスからスタートした経営も、四年目で黒字になった。名刺、名札、カタログ・リーフレット類の印刷など、仕事の九割はコクヨグループから受注している。二〇〇六年末のハートランド設立に伴い、仲井さんは新会社の社長に、三代目社長に工場管理部門を長年担当してきた時枝民生さんが就任した。

「私は八尾工場の管理部門にいましたから、聴覚障害の人たちの顔は知っていましたが。当時は健常者についていく感じで、大きな工場の中で散らばって働いていました。ここでは印刷の入出口から完成までをしますから、それぞれの能力に応じてレベルアップしていくという張り

合いが生まれていると感じています」

平成二〇年度事業推進テーマは『日々技能向上』。昼休みの一時間以外、休み時間はなしというのがコクヨの労働習慣。仕事に支障をきたすほど疲れてきたら、自分の判断で休憩をとるのだという。

DTPで印刷用の版下を作成している古澤由香理さんは、職業訓練校に在籍中に採用された。

「パソコンを使った仕事があったので、就職できてよかったです。仕事はどんどん新しくなっていくますので、私もCADとかWEBデザイナーとか、もっと範囲を広げてスキルアップをしたいと思います」

工場の中で働く健常者は五人。聴覚障害者の中からリーダーが三人誕生している。

「健常者がいなくても、リーダーが職場をまとめていけるようになって欲しい」と寺田さん。辻さんの手話通訳で、仕事の手をちょっと休めてもらった。

名刺印刷などのリーダー、川原学さんは八尾工場から合わせると勤続一七年。事業移転を受ける滋賀工場から八尾工場に技術習得にきていた健聴者の社員と知り合い、結婚して一年半だそうだ。

「この職場は聴覚障害者が多いので、お互いにコミュニケーションがとりやすいです。仕事の責任は重くなりましたが、印刷のことをもっと勉強して、将来はみ

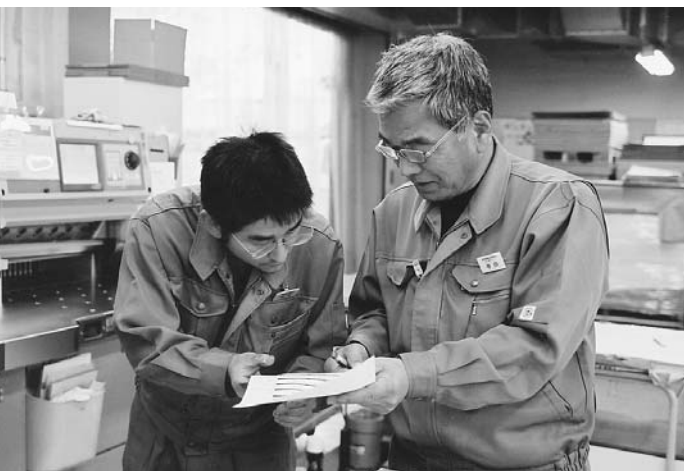
WORKSHOP REPORT



印刷部門のリーダーとして活躍する川田一寿さん（写真左）



製本の坂本善美さんと手話で話す辻孝治さん（写真左）



製作現場で指導にあたる寺田孝製作部長（写真右）

なさんを引く張っていきけるようになりた
いです」

印刷のリーダーは川田一寿さんで、勤
続二年になる。

「リーダーは責任が重いですが、これ
からもチームワークを大切にしていきた
いと思います。障碍者が意欲をもって仕
事をしている会社だということ、特に印
刷を中心にがんばっていることを知って
いただきたいです」

もう一人、製本などのリーダー坂本善
美さんは勤続二九年。聴覚障害者の和太
鼓サークルでも活動する。

「リーダーとしては、機械の音が聞こ
えないので、目で確認して注意をするよ
うに、仕事上では納期を守るようにと話
しています。和太鼓はいろいろなどころ

で演奏をしています、みんなと一緒に
太鼓をたたくのは楽しいですね。聞こえ
ないので、隣の人の動きを見て合わせて
いきます」

最初、聴覚障害があっても安全に働け
るようにと、印刷機にはパイロットラン
プやバイブレーターを設置、コンピュー
ター制御の安全装置付きの印刷機などを
導入した。田井さんは、その必要はなか
ったのかもと感じている。

「当初とは雲泥の差で、いまは健常者
と変わらぬ仕事をしています。教えるま
ではたいへんでしたが、覚えると日々の
仕事ですので、目や指先や皮膚で感じる
ことで仕事ができます。今となって
は設備的な配慮は必要なかったのかも
思っています」

業務改善推進

委員会、レクリ
エーション委員
会などいろいろ
な委員会があ
り、コミュニケーション
ではコクヨKハ
ート通信も発
行。年二回、社
長との懇談会も
ある。事務所
月一回、聴覚障
害者を先生に地

元町内会の人たちが和気あいあいと手話
を学んでもいる。

昨年三月には身体障害者を一人、在宅
で雇用した。時枝さんは、事業をさらに
広げていくのが役割だと考える。

「コクヨグループ全体で、定型化され
た作業は中国、ベトナム、タイに出て行
き、障碍者の職種が減っています。特に
印刷関係は業種全体が厳しいですから、
印刷にプラスしてデザイン的なことと
か、もう少し職種を広げながら、聴覚以
外の障碍者も雇用していきたいと思いま
す。障碍者自身はもう一歩能力を上げて
いって欲しいですね」

作物を育てる喜び。 機械化で「障害」を克服

コクヨKハートの事業では、知的、精
神障害者の雇用はむずかしい……。二〇
〇六年一二月、二代目社長だった仲井さ
んがハートランドの社長に就任、農業へ
の挑戦を始めた。〇七年一月には農業生
産法人の認可を得て、一〇月に初収穫を
迎えた。知的障害者六人が働いている。
「出荷ルートの確保、安定した出荷な
ど解決しなければならぬことはたくさ
んありましたが、半年過ぎて、計画どお
り生産して出荷できるめどが立ちまし
た。『おいしい』と評判はとていいいで
すよ。無農薬ですから、安全です」



ハートランドのサラダほうれん草栽培ハウス



大阪府の南、泉南市の丘陵地帯に広がる「かるがもの里」。辺りは花卉栽培が盛んなところだそうで、ランのハウスや大手百貨店の野菜栽培ハウスなどがある。その一角、三〇〇〇平方メートルの広大なハウスの中で、サラダほうれん草が水耕栽培で育っている。播種から発芽・育苗・定植・栽培・収穫と一年に二回転。夏場は二週間、冬場でも二五、六日で収穫できる。

「なぜこの仕事を選んだか」というと、種まき、定植、収穫と、知的障害者のできる仕事がたくさんあり、雨の日も冬の日も毎日同じ仕事ができるからです。作物を育てる喜び、製品になる喜びを感じられますし、障害者の手で農業の復活をしたいという意気込みもあります」

本格的な生産が始まったハウスの中には一面の緑。温度管理も水やりも培養液の管理もすべて自動制御だ。

「苗は、温度・光・水を自動的に管理する専用の『苗テラス』という装置の中で一定の大きさまで育てます。種をまいてから一日。いい苗ができれば、いいほうれん草が育ちます」

収穫されたサラダほうれん草は、まず予冷室に。サラダほうれん草用に改良した「ほうれん草調整機」が、根を切りそろえて下葉をとる。八〇グラム、一〇〇グラムと目盛りに印をつけたばかりで重さを測る。その束を自動包装機に乗せられ

ば、一つずつパックされる。作業場は、授産施設などの障害者に職場適応訓練の場としても提供している。

ほうれん草調整機、自動包装機、使用済みパネルの自動洗浄機などは障害者雇用促進の助成金を、ハウスや苗の育苗設備などは農業関係の助成金を活用した。

「栽培で使用した後のパネルは手洗いしていたのですが、なかなかうまくいきませんでした。機械ではパネルを重ねて置くだけですから圧倒的に早く、きれいになります。助成金を活用して、機械を最大限利用して、障害を克服する。健常者との隔たりを取り除いて、パートの人たち並みの成果をあげられるようにするのが私たちの仕事です」

立ち上げには知的障害者を雇用して、サラダほうれん草栽培を始めた「野菜ランド立山」に教えを乞うた。

「細かなノウハウを教えていただきました。水耕栽培に使った養液はそのまま流しても害になりませんが、周囲の農家の方が心配されるので、場内処理をして環境ゼロミッションにしています。同じシステムで、コマツナ、サラダ菜、ハーブ類など六〇種類の葉菜類が栽培できま



山本貴大さん。収穫、ゴミ処理と、忙しく働いている

下葉などを取り、計量して包装作業をする
中村美晴さん（左）と川崎幸子さん（右）





使用済みパネルの洗浄は、米田勇輝さんが担当する



育苗床の清掃をする築木瑛一さん

すから、お客様の要望に合わせて対応していく予定です」

立山から各地に広がるサラダほうれん草栽培による障害者雇用は、沖繩・宮古島でも話が進む。

「主役」が 幸せになれる会社に

やわらかなサーモンピンクのオリジナルデザインに包まれたサラダほうれん草は、グリーンが一段と映え、よりおいしそうに見える。袋には、大阪府泉南市産、水耕栽培……とりたい、障害者が作ったとは書かれていない。出荷先は、生協、スーパー、百貨店などだ。

仲井社長がハートランド設立の報告に行ったとき、コクヨの黒田暲^{しゅうのすけ}之助会長から次の言葉を贈られた。

「農業は楽なものではありません。野菜工場で種をまいたらできるシステムかもしれないませんが、市場が高くなったり安くなったり、工業製品をつくるようにはいかないでしょう。さまざまな苦労があるはずで、まして障害者と仕事をするのでしたら、これからは苦難に耐える人間になってください」

そして「その苦勞と苦難の



指導にあたった野菜ランド立山（富山）の宇治稔社長（写真右）と話す仲井社長

の範囲を広げていきたいと思っています。Kハートの経営をしっかりとさせ、ハートランドを支援して、コクヨグループの障害者雇用を促進していけたらと思います」

障害者雇用促進企業として、コクヨKハート、ハートランドの名が関西から全国へ知られるようになる日が近い気がする。



ハートランドのサラダほうれん草

先には必ず見合うだけの喜びがあるはず。その喜びのためにがんばってください」と。

「まさしくそうになりましたよ。障害者に教えられることはたくさんあります。障害者と一緒に苦勞を重ねると、人間はやさしくなりますね」

一年間で水耕栽培にも詳しくなった仲井さんから、挑戦へのエネルギーが伝わってくる。

「ハートランドは障害者のための会社だと認識しています。彼らが主役で、私たちはお手伝い。社員の幸せを実現するのが会社だと思いますが、社員みんなが幸せになる会社をめざそうと思っています」

社員も元気。自分たちが栽培するサ

ラダほうれん草について、「いっぱい食べています」「好きです」「デパートで売っています」「おいしいです！」

三月末までには仲間が増え、近々特例子会社の申請をする。

コクヨKハートとハートランド。

「営業のときは、障害者と接したことはありませんでした。初めは言葉が通じないので困りました。手話教室に通ったりしました」と仲井さん。

「どちらかというと、障害者とは近寄りたいたいというのが本音でした」と田井さん。そのお二人が、いま意欲的に事業を推進する。

時枝さんはコクヨKハート社長として、社員に期待を込める。

「めざすところは、障害者自身の意思で生活設計ができるようになることです。会社をそれほど大きくする必要はないと思いますが、障害者がこんなこともできるといふ新しい職種を探して、仕事の範囲を広げていきたいと思っています」

す。Kハートの経営をしっかりとさせ、ハートランドを支援して、コクヨグループの障害者雇用を促進していけたらと思います」

障害者雇用促進企業として、コクヨKハート、ハートランドの名が関西から全国へ知られるようになる日が近い気がする。